

## 生活が陶冶（とうや）する

園長 児嶋 草次郎

寒露の早朝、10月8日（土）の地元紙宮崎日日新聞を開くと、台風14号の大雨と強風による宮崎県内の農林水産や土木施設関連などの被害額が、539億円になると県が発表したと報じていました。農業被害だけでも101億円だそうです。山間地の椎葉村では、道路の寸断により、椎葉中学校の生徒3人が寄宿舎から帰宅するのに、スクールバスで今まで1時間のところを、熊本県御舟町などを迂回して4時間もかかったとか。

地球温暖化のせいだと言われていますが、このような自然災害が、この頃は日本各地でおきるようになって来ています。この友愛園の近辺でも、ビニールハウスに川の水が氾濫侵入して、ピーマンが全滅した所があります。お見舞い申し上げます。

友愛社・園の被害はおかげ様でそう大したものではなく、胸をなでおろしました。9月18（土）の夜は九州の西側を通り、宮崎県には上陸しなかったのですが、暴風・雨ともかなり激しく、通り過ぎた翌朝6時前に、園内を見て回りました。いつも一番心配するのは、三階建ての方舟館です。

薄暗い中に建つ方舟館は、無傷でした。牢乎（ろうこ）として孤高を楽しんでいるようにも見えました。静養館も泰然とたたずんでいました。しかし、周辺の庭は、小枝、落葉がおおいつくしています。方舟館、静養館を取り囲むイチョウ、くぬぎ、クス等の大木が、守ってくれたのですが、その代償として、これらの枝葉をもぎとられたのです。前日夕方帰宅する時見上げると、狂ったように枝葉を揺らしながら、暴風雨に必死に耐えていました。その一夜の戦いで、イチョウもクヌギも半分くらいの葉を失ってしまっていました。腕以上に大きなイチョウの大枝が方舟館の南側には何本も散乱しています。これらの木々に感謝しながら、庭を一人で散策しました。

園舎の回りもそうですが、これらを片付け・掃除するのが大仕事です。午前中、子供たち・職員みんなで片付けました。かなり広い敷地ですので、枝葉は軽トラック10台分くらいはあります。私は、チェーンソーで落ちている大枝を細断したり折れている花桃や桜を代採したりしました。畑の方の8月末に播いた野菜類は、ほとんど吹き飛ばされましたが、これらは播き直せばよい。

大木が折れた時は専門業者に処理をお願いしなければなりません。毎年これくらいの被害の時は、職員子供たちみんなの手分けして片付け掃除しています。放置せずできるだけ早く元の状態（掃除が行き届いた状態）にもどすことが大事です。

「生活が陶冶（とうや）する」と言います。その「生活」の場・環境が整ってなかったら、「陶冶」などあり得ません。「陶冶」とは、広辞苑では「人間の持って生まれた性格を円満完全に発達させること。人材を薫陶養成すること。」と説明してあります。生活の場・環境が荒れていたら、「ブロウクンウィンドウズ理論」じゃありませんが、子供たちの生活は、ますます乱れたものになっていきます。

実は私は、この片付けをしながら、台風の前日（17日）に来訪された、岡山のある大学のK先生と、その大学を卒業し、今県内の小学校の先生をしている卒園生のK君との会話を繰返し頭の中で反芻していました。宮崎県内の教育現場の研修の講師として招かれ、岡山に帰られる日に、K君が車

で案内してくれたのです。私がうれしかったのは、K君が今も恩師とつながっているということです。大学時代には、色々と御迷惑もおかけしましたが、K先生も忍耐強く御指導くださいまして、彼も無事に宮崎県の教員採用試験に合格でき県内の小学校の先生です。

来訪は今回2度目で、手紙も何度か出させていただいています。その交流の中で先生から教えていただいたK君との会話が、私にとっては、重要なキーワードになって来ているのです。

大学3年のゼミの時、ペスタロッチの「隠者の夕暮れ」・「シュタンツだより」をみんなで輪読した後、K君が先生に次のように言ったというのです。

「先生、ぼくの育った園はペスタロッチがこの本に書いているところと似ている。」そして、「ぼくの育ったところを見てほしい。」とも付け加えたとか。最初の頃のお手紙にそのような話を書いてあったと思いますし、最初にお会いしたときにも話して下さったような気がします。時がたち、こうして彼がりっぱに自立し、恩師とともに小学校教師として訪れるようになると、ますますこの言葉が重く感じられるようになりました。ペスタロッチと言えば、200年くらい前の人。大学の先生も遠い昔の話と思って学んでいるのに、突然、突拍子もない事を言いだしたとびっくりされたのではないかと思います。彼が現代とつなげてしまったのです。

私は近代教育の父・民族教育の父と言われるペスタロッチのことは、父の本棚にあった古い伝記を読んだくらいで、ほとんど何も知りません。まして、子供たちの日頃の指導において意識したこともありませんし、もちろん話したこともありません。彼が大学生になって、幼児の頃から生活した友愛園の生活にペスタロッチの教育の実践を感じたとするならば、それは、石井十次の築きあげた福祉文化なのでしょう。我々が日々の生活で自覚していない所に、その文化は生き続けているという証明になります。

石井十次は、ルソーの「エミール」に感化されて、この茶臼原に岡山から移住しています。自然との共生を通して感性を養い、農業によって自立をめざそうとしたのです。もちろん石井十次は、ルソーを尊敬し具現化をめざしたペスタロッチのことも知っています。今回の話はその頃の福祉文化が、この友愛園の生活の中に今も生き続けているとも解釈できるのです。

そんなことをアレコレ子供たちに話したこともないのに、大学生になったK君が、ゼミの中でペスタロッチの本を読みながら、直観的に自分の育ったところと通じていると感じると、これは私にとっては恐ろしいことです。そのことで彼は自分の育ちがペスタロッチや石井十次の教育につながっていることを自覚し、誇りとともに担当教授に「ぼくの育ったところを見てほしいと」言ってしまう。実際K教授は4年前に来られたのですが、その時幻滅させることがなかったとすれば、その文化に我々は感謝しなければなりません。その後もこうして交流が続いているとすれば、先生の期待を裏切ることはなかったのかもしれない。

9月14日、台風の迫る中をK先生は帰っていかれましたが、私は次のような礼状を書かせていただきました。

拝啓 本日はわざわざ来訪くださいまして、ありがとうございます。不思議に思うのですが、K君は先生との出会いがなかったら、おそらく小学校の先生にはなれてなかった。K君と先生との出会いは偶然のように見えるけど、K君の御先祖様のお導きだったのかもしれないなど、勝手に感じたりしています。

そして、こうして目の前に先生とK君と一緒に腰かけているのがうれしい！お世話になった先生（師）との御縁を大学卒業後も大切にしていこう、これは一つの価値観です。

ここに来る子供たちの価値観は、私たちから見て崩壊している場合が多い。世の中は人の和・輪によつ

て成り立っている。助けたり助けられたりしながら、人間は成長していく。戦後の個人主義の浸透とも関係しているのかもしれませんが、恩を恩とも思わず、大事な人との関係を簡単に切ってしまう。だからますます孤立し落ちこぼれていく。

そういう価値観の中で育った子供たちを、社会に自立させることは、なまやさしいことではない。ここで常識(価値観)を身につけたと思っても、ここを出て自由になったら、また元の価値観にもどっていく。貧困の連鎖の重要な要因だと思います。

K君が先生をこうして案内してくれたことをうれしく思いました。大学を卒業し一人の教員として働き始めていますが、まだまだ精神的には未熟だと思います。これからも御指導、よろしくお願い致します。ご寄付もありがとうございました。

敬具

9月17日

何かに導かれているような気もして、今回のことは記録として残しておくべきと感じましたので書かせていただいています。K先生のお手紙も、我々の出会いをまとめてくださっていますので、ここに紹介させていただきます。主旨を歪めない程度に言葉を変えているところもあります。K先生お許してください。ここで働く職員たちも、ここで生活する子供たちも、この話は知っておくべきです。

拝啓 草次郎先生、お手紙ありがとうございます。私も不思議に思います。K君に会わなかったら、友愛園を訪ねることもなく、昔から興味関心はあっても、石井十次先生の偉大な業績、理念に直に触れることもなかったと思います。

高梁の地に生まれ、福西志計子、留岡幸助、石井十次、児島虎次郎と、偉大な先達の名前、書物は度々目にしていました。成羽美術館、大原美術館に足を運ぶことも幼い頃から多かったと記憶しています。

しかしK君との出会いがなかったら、友愛園を訪れることもなく、先生方にお目にかかることもなかったと思うのです。

私も幼い頃は貧しく、高校大学と奨学金で学びました。K君と違うのは、両親と共に過ごしたことです。貧しいことは恥ずかしいことではありませんが、苦労は多くありました。自分の経験から、学ぶことにより、人生は切り拓くことができるという思いがありました。

だからK君にも夢を叶えさせてあげたいと強く願っていました。今の環境は苦しくつらいことが多いかもしれないけど、今までの努力は君を裏切らないと伝えたかったのです。ただ教員採用試験の直前は、理性ではわかっているけど感情がついていかず、K君は悩んでいました。「消えたい」とつぶやくこともあり。共に寄り添い、他の先生方にも助言をいただきました。私一人では彼を支えきれなかったと思います。

ところで、K君も含めて4人の学生とペスタロッチの「隠者の夕暮れ」、「シュタンツ便り」を輪読、解釈している時、

「先生、ぼくの育ったところは、ペスタロッチのこの本に書いているところと似ている」と、K君が口にしたことがありました。ゼミが終り、K君が一人残っていました。そのタイミングで出た言葉でした。そして「先生にぼくの育ったところを見てほしい」というのです。大学3年生の時でした。きっと彼は、友愛園の理念の素晴らしさに「シュタンツ便り」を通して心から納得したのでないかと思います。大学の講義よりもこの書物との出会いが、彼を成長させたと思うのです。若い感性は本当にいいものです。

K君と一緒に友愛園を訪問できたこと、私も本当に嬉しく思います。K君が迎えに来てくれて友愛園に連れて行ってくれました。4年前、ペスタロッチの絵が実習先の校長室にあったと嬉しそうに報告してく

れた君 K 君。彼の心を育ててきたのは、友愛園の日々でした。私も K 君から多くを学ぶことができました。先生方との出会いにも感謝しています。

かしこ

9月30日（金）

お手紙は何度も拝読させていただきました。ちょうど同じ頃、東京の私の恩師（阿部志郎先生）より「友愛通信」に対する励ましのお手紙をいただきましたので、そのお礼状の中に次のように書かせていただいています。」

「私なりに解釈した石井十次の文化を文字にして、次世代に残していくこと、そのことを常に頭において書いております。」

そうです、キーワードは「文化」です。生活文化です。ペスタロッチは「生活が陶冶する」と言ったということですが、その生活とは、法律やマニュアルや心理療法ではなく、先人たちが築きあげて来た生活文化の中から自然に生み出される生活様式でしょう。随分以前に読んだ「ペスタロッチ伝」（ドウ・ガン著新堀通也訳）を開いたら、次のように書かれている所がありました。

「教育が彼にとってはその唯一の救済法と考えられた。併し実際の生活に基づいて行われ、人間の天性にその種子が発見されるところの総べての有為な諸力を活動せしめる教育、子供がその中であって絶えず活動する教育が必要だった。」

その後、友愛園の生活のどういう所がペスタロッチとつながったのか、K 君にたずねてみると、彼は次のように述べました。

「外見ではなく、職員と子供たちとが実際に家庭的に生活し、子供たちのもともと持っている良いところを引き出していくところ。」

今回、私たちには大きな課題を突きつけられた気もします。児童養護施設が否定されるような社会状況の中で、今後この「家族主義」をいかにして守っていくのか。職員が子供との関係を割り切り、「外見」で取りつくろうようになれば、この文化は、たちまち途絶えてしまいます。